

東京人 TOKYO

2

february 2011
no.293
900yen

平成23年2月3日発行(毎月3日発行)創刊号(1997年)以来毎月29日発行

東京の新しい住まい方

特集

リノベーションと シェアハウス

対談 価値の転換が始まった
三浦 展×馬場正尊

東日本橋・馬喰町あたり
CETエリアが面白い!

東京R不動産 リノベ物件訪問

ひつじ不動産
シェア住居訪問

人生のひんじきをシェアする家。

丸

ノ内線の新高田寺駅から約一分。駅前のにぎわいを背に細い路地を進むと、その奥に一軒の日本家屋がひっそりと佇んでいた。

ガラガラという懐かしい音をたてる木の引き戸。手のひらに収まる真鍮の小さなドアノブ。すりガラスの窓には昔ながらのねじしめ錠がポツンと下がり、木枠と同じその色が、この家が重ねてきた長い月日を静かに物語っている。古き良き昭和を、そのまま閉じこめたようなこの家だが、再生したのは二〇〇七年のこと。築五十年以上の日本家屋を改修し、シェア住居「パウハウス高田寺」として新たなスタートを切ったのだ。

戦後に学生向けの下宿として建てられ、後に長く廃墟となっていたこの家を改修し、再生したのが大関商品研究所の大関耕治さん。飲食店舗で培った古民家リノベーションの経験を生かし、シェア住居の設計・運営に着手、その第一弾となったのが「パウハウス高田寺」である。

味わいのある古民家の佇まいに一目惚れ。

建物は二階建てで、一階にキッチン、リビングなどの共有スペースがあり、一

階と二階にあわせて八つの個室がある。

トイレはウォッシュレット、シャワールームには五右衛門風呂を入れ、各部屋にも洗面台をつけるなど、水回りは使いやすく改修。一方で、味わいのある建物の雰囲気を残すため、改装は最小限に留めることに。たとえばリビングの竹や桜を竿縁にした舟底天井も、ここが和室だった頃の名残。壁に掛かる書も、テレビ台として使われている棚も、もともとここにあったものだそう。古い建物のよさを残しながら住みやすく改修し、アンティークの椅子や照明で、空間にノスタルジックな彩りを添える。そのカフェのような非現実的な空間は、またたく間に話題を呼び、今もなかなか空室の出ない人気物件となっている。

現在、この家には、二十歳代から三十歳代の男女八名が暮らしている。

「ひとつ不動産のサイトでこの家を見て、一目惚れしました」というのは、オープンからの住人のひとり、檜館慶子さんだ。「もともと古民家が好きで、住んでみたいと思っていました。古民家に一人では住めないけれど、シェアすれば住める。一人暮らしでは味わえない暮らしができるところがいいなと思いまし

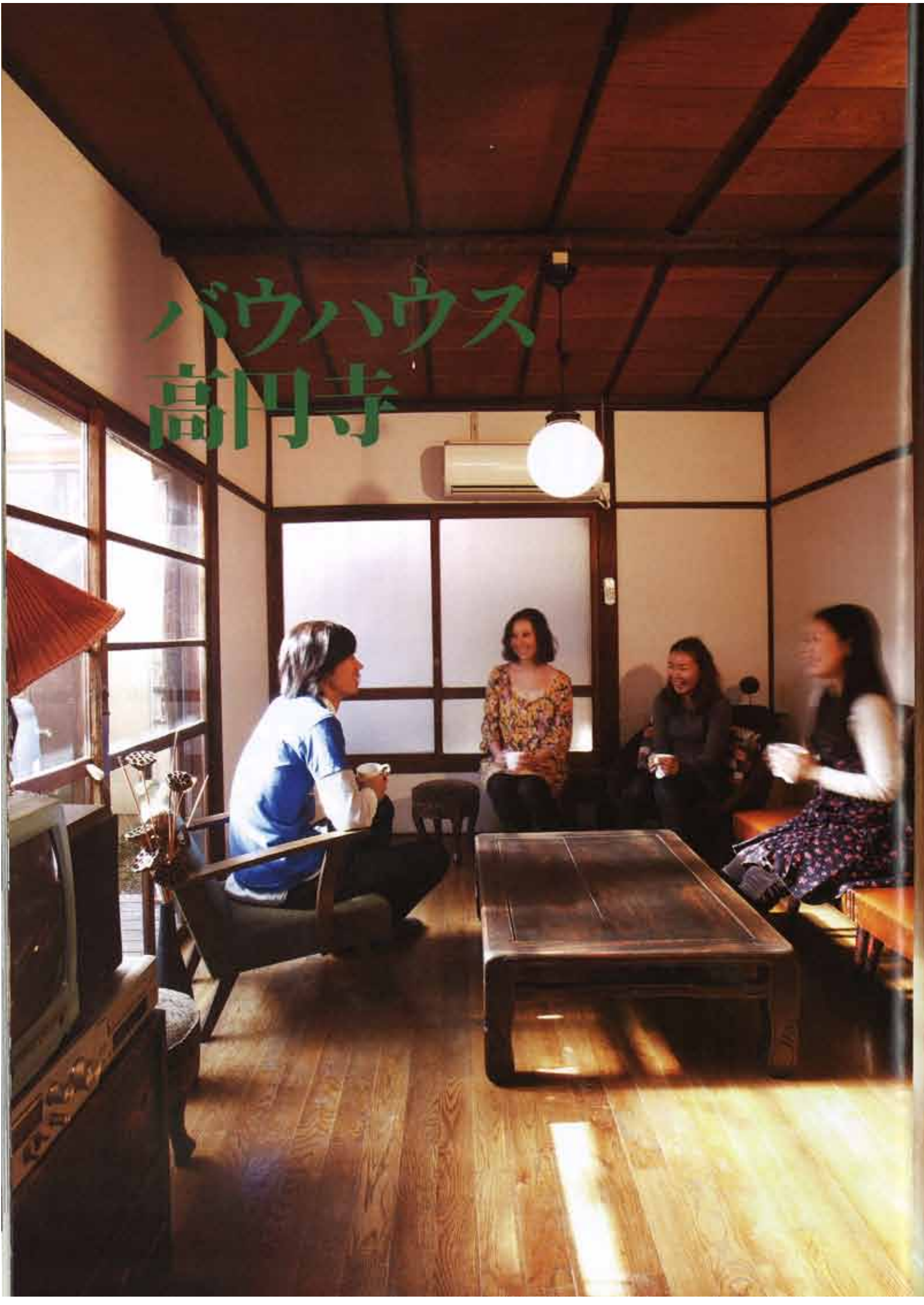
矢部智子・文

text by Tomoko Yabe

右・キッチンの吊り棚には、共有の調味料がいっぱい。1人では買わないスパイスもあり、料理の幅が広がるというものだ。
下・冷蔵庫はなんと業務用。
吉川さん曰く「賞味期限も違ってくるはず」(?)。
上は調理スペースにもなって便利。
左ページ上右・階段の手すりには模様彫り込まれている。
古い日本家屋ならではの遊びが随所に残っている。
同上左・各個室に洗面台が付いて、朝の忙しい時間には助かる。
同下右・共用の風呂は五右衛門風呂。
同下左・リビングの外にはテラスがある。
午前中のランチもよいが、夜にバーベキューなどという楽しみも



バウハウス 高円寺



人生のひびきを シェアする家。

丸

ノ内線の新高円寺駅から徒歩約一分。駅前にきわいを背に細い路地を進むと、その奥に一軒の日本家屋がひっそりと佇んでいた。

ガラガラという懐かしい音をたてる木の引き戸。手のひらに収まる真鍮の小さなドアノブ。すりガラスの窓には昔ながらのねじめ錠がボツンと下がり、木枠と同じその色が、この家が重ねてきた長い月日を静かに物語っている。古き良き昭和を、そのまま閉じこめたようなこの家だが、再生したのは二〇〇七年のこと。築五十年以上の日本家屋を改修し、シェア住居「パウハウス高円寺」として新たなスタートを切ったのだ。

戦後に学生向けの下宿として建てられ、後に長く廃墟となっていたこの家を改修し、再生したのが大関商品研究所の大関耕治さん。飲食店舗で培った古民家リノベーションの経験を生かし、シェア住居の設計・運営に着手、その第一弾となったのが「パウハウス高円寺」である。

味わいのある古民家の佇まいに一目惚れ。

建物は二階建てで、一階にキッチン、リビングなどの共有スペースがあり、一

階と二階にあわせて八つの個室がある。

トイレはウォシュレット、シャワールームには五右衛門風呂を入れ、各部屋にも洗面台をつけるなど、水回りは使いやすく改修。一方で、味わいのある建物の雰囲気を残すため、改装は最小限に留めることに。たとえばリビングの竹や桜を竿縁にした舟底天井も、ここが和室だった頃の名残。壁に掛かる書も、テレビ台として使われている棚も、もともとここにあったものだそう。古い建物のよさを残しながら住みやすく改修し、アンティークの椅子や照明で、空間にノスタルジックな彩りを添える。そのカフェのような非現実的な住空間は、またたく間に話題を呼び、今もなかなか空室の出ない人気物件となっている。

現在、この家には、二十歳代から三十歳代の男女八名が暮らしている。

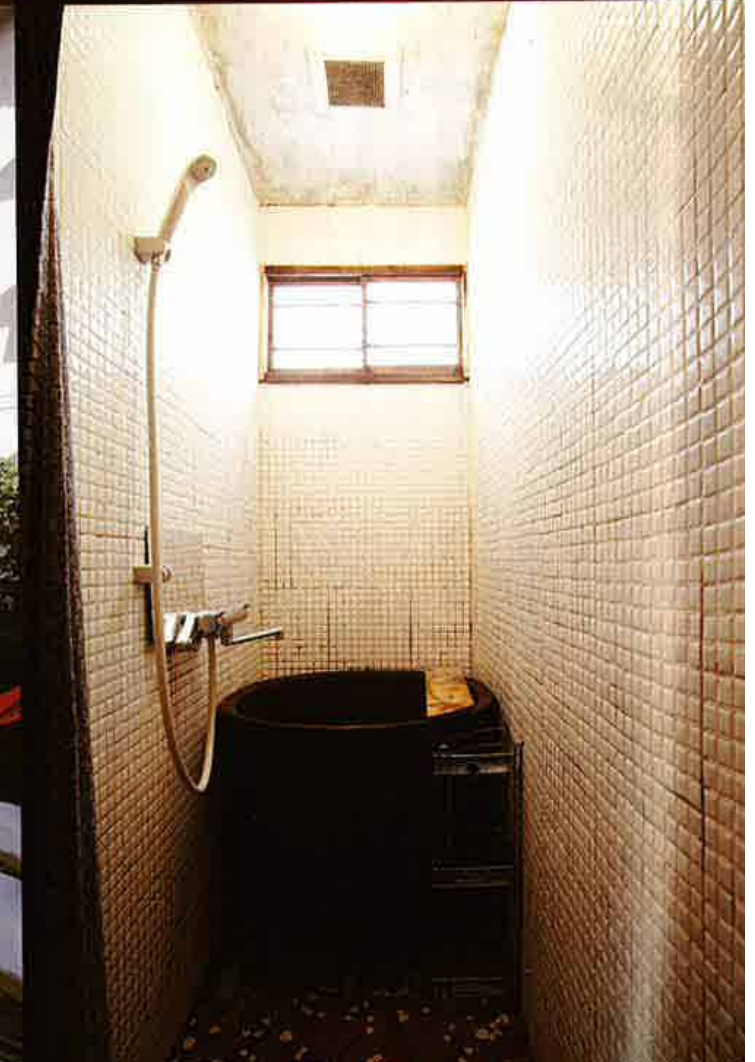
「ひつじ不動産のサイトでこの家を見て、一目惚れしました」というのは、オープンからの住人のひとり、楢館慶子さんだ。「もともと古民家が好きで、住んでみたいと思っていたんです。古民家に一人では住めないけれど、シェアすれば住める。一人暮らしでは味わえない暮らしができる場所がいいなと思いまし

矢部智子・文

text by Tomoko Yabe

右・キッチンの吊り棚には、共有の調味料がいっぱい。1人では買わないスパイスもあり、料理の幅が広がるというものだ。
下・冷蔵庫はなんと業務用。
吉川さん曰く「賞味期限も違ってくるはず」(?)。
上は調理スペースにもなって便利。
左ページ上右・階段の手すりには模様彫り込まれている。古い日本家屋ならではの遊びが随所に残っている。
同上左・各個室に洗面台が付いていて、朝の忙しい時間には助かる。
同下右・共用の風呂は五右衛門風呂。
同下左・リビングの外にはテラスがある。
午前中のランチもよいが、夜にバーベキューなどという楽しみも





た」。吉川康俊さんは、この家に住んで二年半になる。「三十歳になるまで実家暮らしだったので、親に『いいかげん、出る』と言われて(笑)。でも一人暮らしをする前に、こういう共同生活を体験してみるのがいいかな、と思ったんです。もともと海外旅行でゲストハウスに泊まることが多かったので、なんとなくイメージもできました」。

またカナダ出身で、来日して八年になるというエリン・ファーストさんは、数ある住まいの中からシェア住居を選んだ理由をこう話す。「ここに来る前は、大学の女子寮や外国人向けのゲストハウスに住んでいたんですが、そこではみんな学生だったり、外国人だったりして、自分と似たタイプの人としか出会えない。もっと、いろんな人と出会って、いろんな価値観や生活スタイルを知りたいと思ったんです」。

小さな心遣いが、空間の心地よさを支えている。

「おもしろそう」「一人暮らしは不安」「友だちを増やしたい」……。住み始めた理由はさまざまだが、今はみなが「ここでの暮らしが楽しい」と口をそろえる。「冬はすきま風が吹いたり、底冷えしたりする。でもそういう欠点を超えてあまりある魅力が、ここにはあるんです」と吉川さんは言う。

シェア住居にハマる理由。それは空間の魅力にとどまらない。たとえばこの家



上右・びかびかのグラスが並ぶこの棚は、大家の大関さんの許可を得て、入居者たちが作ったもの。
上左・サプライズで取材日にクリスマスツリーが届く。
大関さんの粋な計らいに、一気にテンションが上がった。
下・年の初めには、書初め大会を行ったとのこと。
縮小して小さな額に入れ、窓枠に飾ってある

のキッチンを見ると、共同生活とは思えないほど、きれいに整理されていて驚かされる。「私たちがこの家に出合い、感動したときの状態のままにしておきたくて」と檜館さん。みんなで使うものだから、きれいに洗って片付ける。階段がきしむから、足音に気をつける。この家が好きだから、ルールを守る。住人たちのそんな小さな心遣いが、何よりもこの空間の心地よさを支えているのだらう。

また、一人暮らしにはないシェア住居の良さは、「ぬくもりを感じられるとこ

ろ」だと檜館さんは言う。「たとえ一人で過ごしていても、誰かがいるっていう気配だけで、すごく安心感があるんです。家族と暮らしているような、そんな感覚」。その言葉に、吉川さんが続く。「友だちよりも、兄弟や姉妹のほうが近いけど、やっぱり家族でもない。そういう、ふだんの生活にないような距離感が、居心地がいいのかもしれない」。

仕事も年齢も出身もさまざまな住人たちは、ただ「この家が好き」という一点で結びつき、人生のひとときをシェアし

ている。そこから見えてくるのは新しい「住まい」と、新しい「住まい方」のあり方だ。

リビングにつながるテラスは、敷地いっぱい広がるウッドデッキにソファやテーブルが置かれ、天気の良い日にはこの家のもうひとつのリビングになる。休日にはここで朝食を食べたり、夜空の下でお酒を飲んだりするのでそう。四角い空が広がるその場所では、三方を囲む家の壁が時をせきとめているかのよう、ゆっくと時間が流れていた。●